

わたくしの聖戦

ジハード
女性が働くこと

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連載
230

年賀状という習慣

一般的に新年最初の挨拶といえ、年賀状だろうか。

今や、メールやラインが当たり前のツールとなり、年賀状を書かない人が珍しくなくなつた。ミュージック入りの可愛らしいメッセージカードがスマホ上に届くと、それはそれで新鮮で嬉しい気持ちになる。とはいっても、確かに面倒ではあるものの「やめた」とばかりにスッパリ年賀状の習慣を捨ててしまう決断をするには、それなりの勇気が必要だ。

年賀状の歴史は古くて新しい。

聖徳太子のころから中世にいたるまでの文化は、

唐、すなわち中国を見習つたものが多く、唐の名家による手紙の模範例文集が確認されている。平安時代後期には、かなやひらがなが普及し、文体も優しく和風なものに変化していく。漢文学の大家である藤原明衡という人が年賀状や手紙の例文を記した初等教科書が残っているという。しかし、そもそも一般庶民が文をしたためるということが文をしたためるというふうに、彼女たちには特別で恵まれた環境が与えられていた。たいていは、「女ごときが」と女性の勉学を認めない風潮があり、それは大正から昭和初期まで続いた。なんとももつたない話である。

庶民の間にも手紙を書く習慣が定着したのは、江戸時代後期だろう。寺

子屋が全国にでき、いわゆる「読み書きそろばん」を学ぶ機会が格段に増えた。日本の識字率が世界でも高いといわれるのには、寺子屋の存在や明治以後の教育政策の充実が影響をしていると考えられる。

江戸時代には女性俳人一派が、学校で文字を習い、習字をたしなむことができる時代を迎えた。立派な筆使いの年賀状に感動していたこともある。メルの時代が到来。筆で書くことは一部の人間に限られるようになり、今やローマ字かひらがな入力すれば、瞬時に漢字に変換しててくれる。ありがたいが、それが、そのおかげで漢字がすっかり書けなくなつた。時代の流れは本当に早く、歴史を遠いかなたに追いやってしまい、私は便利さにおぼれてしまう。

年賀状を誰に出すか、の基準はどうなつているのだろうか。お世話になつた人、昔の懐かしい友人、同級生、親戚など、頭に思い浮かぶのは様々だ。なぜか、一度しか会つたことのない人や顔も思い出せない人のやり



その後、ほとんどの人が、学校で文字を習い、習字をたしなむことができる時代を迎えた。立派な筆使いの年賀状に感動していたこともある。メルの時代が到来。筆で書くことは一部の人間に限られるようになり、今やローマ字かひらがな入力すれば、瞬時に漢字に変換しててくれる。ありがたいが、それが、そのおかげで漢字がすっかり書けなくなつた。時代の流れは本当に早く、歴史を遠いかなたに追いやってしまい、私は便利さにおぼれてしまう。

「年賀状はこれが最後といったします」といった年賀状リタイヤ葉書もぼちぼち目に留まる。さて、私はいつまで続けようかと思いつつ、年賀状作りに取りかかる。年始のあいさつのはずが、一年の終わりにバタバタと書いている。思えば不思議な習慣である。

いつの間にか、宛名や名を書いた年賀状は、見かけなくなつた。似たようなパソコンのフォント文字ばかりで、素気ない気持ちは否めないが、悪筆で住所や名前が読めない年賀状で苦労する配達人のことを思えば、きれいに印刷されたもののほうがいいのだろう。